

罌粟 《けし》 の中

横光利一

青空文庫

しばらく芝生の堤が眼の高さでつづいた。波のように高低を描いていく平原のその堤の上にはいちめん真紅のひな罌粟げしが連続している。正午にウイーンを立つてから、三時間あまりにもなる初夏のハンガリヤの野は、見わたす限りこのような野生のひな罌粟くれなゐの紅に染まり、真昼の車窓に映り合うどの顔も、ほの明るく匂においさざめくように見えた。堤のすぐ向うにダニユーブ河が流れていて、その低まるたびに、罌粟の波頭の間から碧あおい水面が断続して顕あらわれる。初めは疎まばらに点点としていた罌粟も、それが肥え太ったり瘦やせたりしながら、およそ一時間もつづいたと思うころ、次第に密集して襲い来た、果しない真紅のこの大群団であつた。梶かじはやがて着くブダペストのことを、人人がダニユーブの女王といつてきたことをふと思ひ出した。多分、ウイーンの方からこうしてきた旅人らは、このあたりの紅の波により添つて流れるこの河水を眺ながめ、自然に口からのぼった言葉だろう。こんな風景は歐洲のどこにも見なれなかつた眺望ちようぼうだつた。自分を乗せた車の下の、レールの中までこの罌粟は生おい茂もっているかもしれないと彼は思った。そして、暫しばらくはひとりぼんやりと見るには惜しくなつて知人の誰彼の顔も浮んで消えたりするのだつた。

彼はまた幼いころ日本でよく歌つたことのある、ダニユーブの漣さざなみという唱歌を思ひ出し

もした。そのころは、自分がハーモニカを吹き、姉がヴァイオリンを弾いて共に愉んだあの夏の夕暮だったが、いま姉も一緒につれてここをこうして旅したなら、どんなことを姉は云い出すだろうと空想したりした。この空想は梶には非常に愉しかった。汽車の音を聞いていても、車輪の廻転していく音響がいつか少年のころのその歌に変わって来たりして、河水の碧く白く日を浴びてどこまでも連つていくあたりの野の中が、

「タアン、タ、タタタン、タアンタ、タアン」

と、このような調子の歌となり、梶はしばらくそのメロディを胸中ひとり弄んでみるうち、実地にそこを走っている自分のことをもう忘れた。それはちやうど、遠い流れの向うから聞えて来る草笛の音のような、甘酸っぱい感傷の情のおもむきで、ひたひたと身に迫つて来る水に似た愁いさえ伴うのだった。またこのような幼い歌の蘇つて来たのは、歐洲では、やはりここだけだったと思った。一つは彼は、このハンガリヤについてはそれ以外の狂躁曲より何も知らぬ白紙の状態で、却つてそれが彼の曇りを拭き払っていたのかもしれない。もし行くさきの野の中に、ひな罌粟と河の他何もなくなるとも、これで来てみただけのことはあつたと思つた。

ブダペストへ着いたときは四時すぎであつた。罌粟の他は山一つ見えなかつた原野の中

に、百数十万の近代都市がただ一つ結晶している外^{がいぼう}貌の印象は、ホテルの自分の部屋へ着いてからも、まだ梶の頭から離れなかった。駅からすぐホテルへ来るまでの道に、太い街路樹の多く見えたのが先^まず彼を歓^{よろこ}びしたが、それより案内された自分の部屋が何より彼の氣に入った。三十畳敷もある大きな部屋で、真赤な絨^{じゅうたん}氈の上に、大きな二人寝の彫刻のある麗しい寢台が二台も置いてあつて、それとはまた別に休息用の寢椅子もあり、浴室も附いていた。それは特別高価な部屋でもないに拘^{かかわ}らず、一瞥^{いちべつ}しても、先^まず梶には贅^ぜ沢^{いたく}にすぎた豪華なものだった。高さも彼の所は適當な三階で、窓からすぐ真下の道路を傍^{そば}のダニユーブ河が流れていた。

しかし、残念なことに梶はこのとき、続いた汽車旅で疲労が激しかった。それに來てみたものの、一人の知人さえいるわけではなく、どこに何があるかも知らず、言葉も知らなければこの地の歴史さえ不案内だった。蒙古^{もうこ}のことをモンゴロワといい、モンゴロワをフオンゴロワと読み、フオンゴロワをフアンガラワ、それをまた転じてハンガリヤと化して來ている唇^{くちびる}の作用から考えると、あるいはここもまた、十二世紀以來東洋の草原の英雄が、黄旗を押し立てて流れ襲つて來たところかもしれないが、見たところ、通つて來た街のここかしこの人人の様子も、どこも西洋と變らなかつた。

彼は旅装を解くとすぐ寝台に横になり、疲労の恢復かいふくに努めることにした。そうしていつときも、彼が東京を発たつとき、パリからここへ来たことのある医者いしやの友人が、

「とにかく、あなたはハンガリヤへだけは、ぜひ行つて来なさいよ。あそこは良い」

とそう云つたことを思い出したりして、疲れの溜たまつた背中の痛みの容易に去りそうもないのがまどろかしく感じた。

「良いというと？」

と梶はそのときまた医者いしやに訊ね返したのも、彼のそう云う表情には、歡喜の情ともいふべき思ひらわず閃ひらめく美しいものが発したからだつた。

「いや、あそこほど美人の多いところはない。それに日本人のもてること、もてること、もう滅茶苦茶にもてる」

医者いしやはこう特別に強い表現で云つてまだ何か足らぬらしく、深く顎あごを胸へつけ、なお思あい出の深い感動を顯あらわそうとしかけたところへ、突然他の知人が傍へよつて来て、まったく別べつの話をし始めたので、梶と医者とのハンガリヤに関する話は、そのままに立ち消えになつてしまったことがある。

梶は寝ながらも今こそ医者いしやの、顎あごを胸へ埋めようとした刹那せつなの表情を思うと、途中の車

窓から見えた群がる真紅のひな罌粟が眼に浮び、あの花の中から何が出て来るのかと、多少の好奇心もまた覺えた。またこの友人の医者とは別の人人たちにも、梶はパリでハンガリーの事について尋ねてもみたが、みな同様に、

「あそこは良いということだが」

とただそう云うだけで、行つてみたという日本人は一人もなかった。しかし、日本人がひどくそこでは好かれるということについては誰もが異口同音で、自分も行きたいと洩したことに違いのなかったことも確かだった。それも、梶はいつの間にか今そこに自分がいるのだった。梶は西洋を廻つてみて、世界の内容はどこも変わらず損得の理念に左右されていることをますます明瞭めいりょうに感じていたときしも、ここだけは不思議と好き嫌いきらで動いている表面が表情にも顯れていて、寝ているときのこうした背中の痛みさえ、そんな気の弛みゆるも手伝っているのかもしれないと思つたりした。しかし、ここは通つて来た道すじを考えただけでもあまりに遠ざかった感じだった。実にはるかな遠くに日本が見えて寂しかった。

夕食まで彼はひと眠りしたいと思つているとき、ノックの音がした。梶はホテルの者だろうと思つて黙つていると、肥満したあからが顔の男が一人勝手に這入はいつて来た。片手に自

分の帽子を持つてにこにこしながら傍まで来てから、男はサーカスの使い手のように両手を大きく翼形に開き、片膝かたひざをつく姿勢で最敬礼を一度した。見たところ、大学の教授のような品威のある堂堂とした紳士である。梶も怪しみを感じなかったが、疲労の折のこととて半身を起すのも物うく、見ているままの容子ようすであった。

「旅のお疲つかれのところを、お伺いいたします御無礼をお赦ゆるし下さい」

と、この紳士は、少し翻訳ほんやく口調の嫌きらいあるとはいえ、先ずそんなに間違いのない日本語で梶に詫わびてから、ヨハンというハンガリヤ名の名刺を出した。

「私はこのホテルのものではございません、日本語の勉強のため通訳といたしまして、あなたさま御滞在中の御便宜をお取りはからいたす考えのものであります。何卒なにとぞ、御用お命じ下さいますなら、私ども幸いと存じるものでございます。当ホテルを本日訪問いたしますれば、あなたさまの御来訪を教えられましたにつきまして、出張いたしました。お宜よろしければ、本日の午後五時半に再びここへまかり出ますから、それまで御用意下さいますなら、私の光栄でございます」

紳士は手紙の文句を読むような調子ですらすらと述べ終ってから、暫く直立不動の姿勢で彼を見ていた。敬語の使用が少し怪しく響き、舌の廻りかねたふしぶしもあったが、久

しぶりに聞く日本語のこととて梶も異様な興味をもって、すぐヨハンの案内をこちらからも申し込んだ。ヨハンは梶の疲れを察したもののか、また這入って来たときのような敬礼の仕方では、廻れ右をしようと、そのまますぐ外へ出ていった。梶はこの国の街へ降りてもまだ案内人を自分から依頼したことがなかった。そして、万事ただ一人で行動していたため、この度のヨハンの不意の出現は却って不自由ささえ覚えたが、そこにハンガリヤらしい愛情のひそみあるものも感じ、不審を起さず一切彼のいうままに随^{したが}つて見ようと決めてから、再び寝台に身を倒した。しかし、考えてみると、まだ案内の値も訊^きき質^{ただ}さなかった落度が自分にあつた。そこに多少の不安さも感じられたが、とにかく、相手はハンガリヤ人である上に、珍しく日本語を解している人物だという点でも、疑つてはならぬ貴重な人だと梶は思った。

この夜ヨハンの案内してくれた場所は料亭で、食事をしてから後に、最少は五歳、最年長は二十歳の二十数人からなるジプシイ楽団のヴァイオリンを聴^きいた。この楽団はみな暗譜で自由な絃^{げん}の動きが感じられた。生れたときからの生活そのものがヴァイオリンの弓から始まるとの事で、韻律も流れのままに荒野を生活してゆく、奔放幻怪なおもむきは強烈なものだった。案内はそれで終つたが、それはむしろ、ヨハンの好意ある案内だったとい

って良かった。梶はその日の早い帰りで翌日疲労を恢復した。そして、予定の五日間の滞在中は、自分からヨハンの案内料を訊ねないことにしようといよいよ決めた。

次ぎの日の午後三時にヨハンが来た。梶はこのときはもう、二人で観に行くことに興味を感じるよりも、自分を引き廻して行くこのヨハンの方に興味を覚え始めたといつて良い。二人はダニューブ河中にある島の料亭で夕食をすることにした。これもヨハンの考えであった。料亭は緑樹に包まれた公園の中で食事は野天である。葵の一種のゲラニヤが真紅の花をもち咲かせた夕暮の美しさは、河波の上に迫って来る薄明の思いにもさし映り、梶はふと過ぎて来た空が慕わしく、胸に溢れて来るのを感じた。花の紅さが空と水とに沁みにじみ、水面に眼をつけてはるか遠くを仰ぐような哀愁だった。

食事をすませると、ヨハンは行く先の註文をしない梶に困惑したものか、またホテルへ連れて帰った。彼の部屋の下道から、ヴァイオリンの音締めめの音がときどき洩れて来た。梶はヨハンと二人でソファに凭つて話をしてるとき、ダニューブの真向いの岸に月が出て来た。波が白く部屋に對つて線を引き細かい網目の綾をひろげているのが、長く月を忘れていた彼には思いもうけぬ慰みとなった。

「もう始まりますよ」

とヨハンがその時云った。

「何がです」と梶は訊ね返した。

ヨハンは音楽だと答えた。なるほど、部屋の下の道から、月の出るのを待ち構えていたのであろう。ダニユーブの漣さざなみの曲の合奏が始まった。彼はヴァイオリンの音を聞きながら、ヨハンの案内の仕方もある手の込んだ劇を見せる変化に苦心を払っているのだと呑み込めた。漣の曲は対岸にある王宮の上から、月の高くのぼってゆくのに随って、次第に高潮し麗しさを加えていった。

「あれを弾ひいているのはジプシイたちですが、あの中でも一番の名手ひらです」

とヨハンは説明した。音色に滴したたるような弾力があり脹ふくらみがあつた。譜も見ず、ゆらめき出て来た月の真下で、彼等は露天にそれを仰ぎさざめく波に合せつつ弾くのだった。ヨハンは又ジプシイのこの仲間らが季節のまにまに、ヨーロッパの各地を流れ廻ってゆく生涯のことを話し、他の一切のことを考えず、ヴァイオリンのみを抱きかかえて死んで行く、彼等の宿命の愁うれいや歓よろこびを話したりした。

「あれらは音楽そのものですよ。本格のものもやれるのですが、やはり譜にあまり捉とらわれではありません。そんなもの面白くないのでありましょう」

「この市民権もないのですね」

「ありません。日本語では何といえますか。渡り鳥、そう、あれです」

ヨハンの云うことは、ここしばらく渡り鳥の生活をしている彼には、特につよく胸に滲しみとおる語感でさみしく迫った。ダニューブの漣が終ると次ぎに、彼のまだ聞いたこともない悲調な楽器の音が流れて来た。

ヨハンはすぐ、

「あれはタローガツタといって、ハンガリヤ独特の木の楽器です。やっているものもこの国第一等の人です」と説明した。

窓から彼は下を覗いて見ると、真黒な尺八の形で裾の方がやや開き加減の、クラリネットに似たものだった。

そのタローガツタの音は、初めは荒野をさまよう生活の音のようだったが、それが漸次に地にひれ伏す呻きのように陰に籠り、太い遠吠えの底おもくうねる波となり、草叢を震わせる絶え絶えな哀音に変ったかと思うと、押し襲ってくる雲霞の大群のふくれ雪崩のような壮大な音になった。そうして断れることもなく続く間にも、波うつ地表の果てもない変化が彼の頭に泛んで来るのだった。

「それでは、明日の午後、二時にまた参ります」とヨハンは急に云つて音楽の途中で帰つていった。

部屋で彼ひとりにこのダニューブの月出の情緒を味い^{あじわ}させたいヨハンの、心の籠つた引き上げ方だった。ひとりになってからも梶は、広すぎる二人寝台の、それも二台も連つたその一つの片隅^{かたすみ}にこつそりと寝た。そして、また窓の下の音楽を聴いていたが、タローガツタはなお熄^{やす}む様子もなく河の上に射す月の光に応じた。それは千里に連る原野の秘めた歴史のようであつた。高鳴りひびく音が旗を巻き、崩^{くず}れ散り、怨^{うら}みこもる低音部の苦しみ^{ちようおう}悵^{ちようおう}快とした身もだえになると、その音は寝ている梶の腸^{はらわた}にしみわたつた。

翌日はまたヨハンは約束の時間に顕れた。この日は昼の間街の名所や旧跡を廻つた。案内しながら話すヨハンは驚くべき記憶力と彼の博学さを少しずつ謙遜^{けんそん}に示し始めて来るのだった。また彼は大学で日本語を教えていること、日本へは一度も行つたことはないが、好きなため一人で日本語の勉強を始めたことなどを梶の尋ねるままに話した。街中で出会う知人たちもヨハンに示す挨拶^{あいさつ}は、尊敬をふかく顕しているのを梶はしばしば目撃した。このヨハンに重ねて梶があなたはどの国の言語に一番熟達しているのかと尋ねてみると、

自分は英語だと答えた。そして、

「わたくしはイギリス人の案内役もときどき頼まれますが、これは拒ことわっております」

と、どうしたものか、ここだけ顔を赧あかくし、幾らか憤然とした語調をこめて云った。またダニューブの橋を渡るとき、ここではこの河を何と呼ぶのかと梶が質問したのに対して、ドユナと短く呼ぶとも教えた。

「この河はダニューブ、ドノウ、ドナウレスク、ドユナ、それぞれ読み方がありますが、むかしからドユナでもこの地が一番好かれますために、各民族から取り合いが激しかったところです。温泉もここだけで百二十もあります」

こう云ってからヨハンは、橋の袂たもとに蹲すくまっている大きな獅子ししの彫刻を指差し、この口を開けた獅子に舌のないことを云ってから、橋の開通式に見物が押しかけたとき、

「みなのはこの獅子には舌がないと云って、笑いました。そうしますと、その彫刻家は自殺しました」

と話した。ヨハンの口調は童話じみた明るい単純な響きをもっていたので、梶も思わず笑い出した。が、その明るさの下に抱いた底知れぬ話の淵ふちを覗のぞくと、何かあるぞつとした恐怖を覚え、

「どうして自殺したのです」

と愚かな質問をしてしまった。

「どうしてでありましょうか」

とヨハンはでっぷりした腹部を揺りつつ、
あからが 赧 顔をなおからからと笑わせて一人先に
 橋を渡っていくのだった。

そのヨハンの謎めく豪快な笑い声と、舌を落した間のぬけた感じの獅子との対象が、何となく梶には痛快な人間諷刺の絵を見ている思いで、幾度も振り向き獅子の傍から去りたかった。

その日は王宮や古代建築を見て廻ってから、梶は不足になった金を補いたく銀行へより路した。そして、この地で入用なだけをヨハンの云うまま預金の中から出して貰うとき、不覚なことにも、日本を出発に際して銀行員の記入した紀元年数に、一年の間違いあることを指摘された。預金帳を見ると、なるほど明らかに誤記してあった。ヨハンは何事かの地の銀行員と暫く話してから梶にむか対い、

「この期日の間違いには、銀行として応じるわけには不可いかないそうですが、あなたは日本の方ですから、特にこの度たびは、規則を破ってお払いすると、云いました」

とそう云つて、所用のハンガリヤ紙幣を梶にわたしてくれた。梶はふかくその銀行員の好意に感謝し銀行を出た。しかし、彼は歩きながらも、日本の銀行員の落度と、それに氣附かずハンガリヤで指摘された自分の二つの落度が、忽ち諷刺の爪をむき立てた獅子に追われるようで暫く不愉快になるのだつた。

「みなものは、この獅子には舌がないと云つて、笑いました。そうしますと、その彫刻家は自殺しました」

自分がその獅子か彫刻家か、しかし、どちらにしても、実に梶には恐るべき童話になるのだつた。特に自分の国に好意をよせ、出すべき舌を隠していてくれる場所であるだけに、なお彼にはこの罌粟けしの中の都会が恐るべきものに見えて来た。

その夜、ヨハンは食事のとき、また昨夕とは違つた料亭へ梶をつれて行つて、そして云つた。

「この家の料理はこの国で一等です。ハンガリヤ料理です」

三日目に、ようやく彼はこの国の最上の料理を梶に食べさせてくれるわけだつた。ここでも島の中の料亭と同じく庭の中の野天の食事だつたが、別れた客席のそれぞれが、花や蕾つばみをつけた自然の蔓薔薇つるばらの垣根かきねからなる部屋で、隣席が葉に遮さへぎられて見え、どの客も中

央の楽団から演奏されて来る音楽だけを愉しむ風になっていた。

「いかがですか、ここの料理は？」

ヨハンは梶からここだけ答えを聞きたいらしかった。料理はダニューブの魚と野菜に独特な美味なものがあつたが、味はどれも味噌に似たマヨネーズで統一をつけてあるためか、梶には少し単調にすぎて塩しお辛からかつた。原野の強烈な色彩の中で育つた調味法は、塩を利かす工夫に向けられるのも、自然な生理であろうと梶はのべたが、実は、料亭そのものの方がはるかに美しく、音楽もウィーン風の庭に似合わしいのが、爽すがすが爽すがしい気持ちだった。「今夜はひとつ、踊場を御案内いたしましょう」とヨハンは、料亭を出たとき珍らしく梶に云つた。

その踊場もこの国では一等のところだとまた彼は話し、一度ホテルへ戻ってから時間を待つて、二人はある家の門をくぐつていった。中は奥深い劇場に似ていた。中央のホールを囲む客席のボックスも、全面が真赤な天鵝絨で張り廻めぐされた、一国の首都には適当な設備の完備した豪華なものだった。

集っている踊子らもここのは数多く揃そろつてみな美しかった。中でも一人際立きわつた若さで、眼の異様に大きく光る子が、もう相当に見えていた各国の旅客たちの的らしかった。梶は

かち合う客らが尾を曳いてその子の後を追う露骨さが面白かった。踊りの合い間には、どこの国でも同様の流しの芸人たちが、時間を決めて廻って来ると、ボーカル、手品と退屈の暇もなく時間はたつのだった。バンドもここは緩急の調子も良かった。その中に、伯爵の放蕩息子ほうとうしゅだという若者が一人混ついていて、おどけた表情でバンド一座の采配さいはいを振っており、その様子がいかにも粹人のなれの果たと云いたい枯れた手腕を発揮していた。ホールの客の興奮が次第に昂まりたかのぼって熱して来たとき、突如として外から一団の娘たちが繰り込んで来た。そして、ホールの人人のサツと裂け開いた中へ流れ込むと、時を移さず急調子に鳴りひびいたバンドに合せ、踊り撥ねはねる小鹿の群れのような新鮮な姿態で踊りつづけた。みな揃いの空色に、黄色な肋骨ろっこつをつけた騎兵の服装で、真赤なズボンに黒い長靴を穿はいていた。顔にかかる滴りの飛び散るような鮮かさだった。

「この子らは市の踊子で一番権威を持っているのです。ハンガリヤの踊りです」

と、ヨハンひるがえは云った。この十人ほどの踊りはいろいろに変化したが、間を保たせず、閃めき変り、翻ひるがえつてゆく調子の連続に訓練のこもった妙味があった。踊子らも選りぬきと見えそれぞれに優劣の差のない、揃った清潔な感じがした。手襪てあかの染まぬ若い騎兵の襟首えりくびの白さにちらりとほの見える茎色の艶つやがあった。実に眼醒めざめるばかりの美しさだった。

「なかなか面白い踊りですね」

と梶は見飽きずに云った。ヨハンもそう云われたことが嬉しいらしく、この踊りだけは観賞し直すという風に、

「日本の方が御覧になると、どの子が美しいと思われませんか」と梶に訊ねた。

「そうだなア」

すぐには批評しがたく笑いながら梶はまた眺めた。

「前列の右から三番目の子かな」

揃った肋骨の迅い動きの中から一人を選ぶのは、難しかった。殊に日本人の観賞の眼も共に選ばれていることも、この博學なヨハンの太った笑いの底にひそんでいた。

ハンガリヤの踊りは澆刺とした空色の屈曲の連続で終ると、また踊子らは、さっと未練げもなく馳け足で退場した。そうして、一団が梶らの傍を擦り崩れて走り去ろうとしたとき、ヨハンは急に手を延ばし例の右から三番目の子を呼びとめて手招きした。しかし、何の答えもなくそのまま一団は去ってしまった。ホールは再び客たちの踊りで満たされた。場中のどの席からも、市づきの踊子と呼ぶものがないときに、梶ひとりの席が呼びとめ

たその異例に、彼は顔の赭らむ思いもつよく不満だった。それも招きに応じて来たものならまだしも、振り向きもせぬ寂しさを味^{あじわ}うのは、沁み入る異境の果ての心細さに変るのだ。梶は今日はたびたびの不覚だったと思い、ヨハンの立ち上るのを待ちかねながら、所在もなく、今度は眼の大きな踊子の後を追いつづける旅客たちの、乱れる様を眺めているばかりだった。

「さっきの子らは、客席へはどこへも来ないのですよ」

とヨハンは、梶のさみしむ心を嗅^かいだと見え、暫くしてからそう彼に説明した。

「来ないのに呼んだのですか」と彼は笑って訊ねた。

「この席へなら来ます」

「しかし、呼んだのは僕らだけじゃありませんか」と彼は少し不服も出た。

「もう来ることでしよう」

と、ヨハンはそこが外人のこととて、日本語の遣^やり取りの機微も分らぬらしく、至極のどかなものだった。梶には、このヨハンの大きな顔は舌のないハンガリヤの獅子に似て見えた。そしてこの席へなら踊子の来るという意味は、このホールに限り来るという意味か、それとも、日本人専門の客を扱うヨハンの席へは必ず来るという意味か、そこが梶には分

らなかつたが、自信をもつてそう云う落ちつき払つたヨハンの態度には、明るさが増して来た。もしこのホールに限り日本人以外の所へも来るものなら、他の客たちも呼びとめぬ筈はない、市づきの踊子らの揃つた美しさだった。——しかし、梶には、この街に於いてのヨハンの特殊な地位を考えぬ以上は、まだそこに呑み込めぬものが残つて来た。ヨハンの人品、彼の学殖、そして、彼の通るときに知人の彼へ示す挨拶の仕方などを察するとき、梶には、ヨハンがただ者でない名を秘めた人物だということだけは早くから感じられた。また、舌のない獅子の諷刺を橋畔で示したさいにも、彼のあげたあの豪快な謎めく笑いには、際立つた智量の人物が覗いていて、凡人の案内人に出て来る芸当ではなかつたと彼は思った。実際、この遠くへだたつたハンガリヤの地で、独学で難事な日本語の勉強にいそしむためには、彼のように、こうして来る日本の旅客を捉え、案内役を引き受ける以外に方法はないであろうと察せられる。

暫くしたときヨハンの自信は当つた。そして、三番目が騎兵の服を常服に着替えて一人表の方から来ると、彼の傍へやつて来た。

「この子でしょう。あなたの仰言つたのは」
おっしゃ

とヨハンは踊子を彼の傍に坐らせて訊ねた。そうだと梶は答えるにも、跳ねる騎兵の服

のときとは違つて静な常服の姿のためか、一見、それがそうだったのかどうか、箱の中では判明しがたい娘の変り方である。しかし、梶は何か話そうにも話がまるで通じなかった。先ずこの娘の好きな食物と飲物を取りよせてみたものの、日本の娘とよく似た淑やかな羞恥ゆうちを浮べ、ヨハンが何か訊ねても短い答えを云うだけだった。料理にも口をつけず、斜め対むかいに梶と坐っているだけで、ホールに舞い立って来ている情熱的な興奮のさ中では、彼女はむしろ、舞い落ちて来た一輪の静寂な故郷の花の色かと見え、一層深く梶は郷愁を覚えて来るのだった。

「何という名？」

梶の訊ねたのに対してヨハンが代りに、

「イレーネ」と答えた。

イレーネはヨハンにまた何か囁ささやくと、ヨハンはそれをまた梶に通じて、

「この子はあなたのネクタイを、いいネクタイだと賞めていますよ」と云った。

それでは君が結婚するとき、その愛人にやるネクタイを、もしこれと同じにする気があるならパリから一つ送ろうと梶は冗談を云つてみた。

ヨハンはそれをまたイレーネに告げてから、再び笑いながら、あなたに接吻をしなさい

と今云つたのですよ、と梶に云つた。イレエネは云われたごとくおそるおそる、梶の方へ身をよせかけて来て、そして、彼の右の頬ほおに唇を軽くつけ、ぽっと赧あかくなったと思うと、両手で顔を蔽おほつて俯向うつむいてしまった。

「この人は日本の娘そっくりだなあ」

と梶は笑つた。そのとき、渦巻うずまいているホールの賑やかさの中から、バンドの喇叭手らっぱしゅがただ一人、濡ぬれた唇に輪形をつけしきりと梶の方を向き向き、喇叭を吹いたり止めたりした。

「あつ、あの喇叭はこの子を愛しているな」

と梶は頬杖ほおづえつきながら思わず洩もらした。すると、ヨハンはまたすぐその喇叭手を手招ぎした。喇叭は楽器を椅子の上へ置き残したまま席へ来ると、ヨハンは彼にまた梶の洩したことを話してみたらしく、

「やはりあなたの云われたようでした」

そう云つて笑つた。ホールはますます高潮して来た。いつの間にか踊る客らの数も増して来ていて、いっぱいにさざめき廻る渦は乱舞に近く、梶はハンガリヤ狂躁きようそう曲もこうした興奮の旅情から描かれたものかもしれないと思つたりした。そのうち、餅もちの殻がらが各

席に配られると、客らはそれを手ん手に掴みあたり介意わず投げつけ合った。それまで静にしていたヨハンも大きな体を乗り出させて、ホールの渦を目がけて手あたり次第に投げつけては笑った。その彼の様子には、大学校教授の少年の日の腕白さがふと丸出しに顔を出し、梶も愉快で餅殻をヨハンと一緒に投げつけるのだった。

「もつとやりなさい。もつと」

と、ヨハンは餅殻をかき集めては彼にすすめて立ち上った。遠くで殻を巧みに受けとめた客は、それをまた投げ返したり、爆け散り飛ぶ中で身を竦めたりした。

このような喧騒を極めた中でも、彼の箱の一隅で、喇叭はイレエネの肩に手をかけ、何事か一心不乱のさまで彼女の耳にかき口説いてやまなかった。喇叭の腕に巻きつかれた中で、じつと竦んだまま首垂れてゆくイレエネの首の白さを眼にしながら、彼は寂しさを感じた。そして今度は眼の大きな踊子に狙いをつけ餅殻を投げてみるのだった。その子の体は、周囲から飛び来る弾の集中射撃を浴びていて、身を飜す暇もなく、絶えず肩に胴に餅殻は爆けつづけていた。ぴしやつと頬にあたったときは悲鳴をあげたが、すぐまた反対の側から同様のを続けて喰うと出かかった悲鳴も声にはならず、もう不貞不貞しい覚悟でさらに飛び散る弾の中を踊り潜つてゆくのだった。

「あの子可哀想かわいそうに、やられてばかりだなア」

梶は投げつけようとしていた餅もやめにして云った。

「どの子です」

「あの子」

おいおい、と云う風にすぐまたヨハンは、眼の大きなその踊子を手招きした。この踊子も小趨こばしりに彼らの箱へ来ると、これはイレ―ネとは違い、いきなり真近く梶の傍へびたりと擦すりよつて来て、じつと彼の顔を正面から覗みめた。傍で見ると、その眼はあまり大きく却つて表情が分らなかつた。爛爛らんらんと光り輝く眼で、今にも飛びかかつて来そうな底知れぬ黒さだつた。

梶は場中の華形ばかりをよせ集めた絢爛けんらんさに取り囲まれ、いつの間にか、各席の視線を吸いとつてゐる自分が不思議だつた。

「これはアンナと云う名ですが、ホテルはブリストルかと訊きいていますよ」

とヨハンは暫くして彼に云つた。そうだと彼が答えると、アンナは何事かまたヨハんに云つた。

「この子はあなたに、今夜これからホテルへ連れて行けつて云いますよ」

これには梶も即答に窮した。どうしたことか、日ごろの不粹がはたと途惑いしたようだったが、またそんなことでもない、傍にいるイレ―ネへの義理が、それだけは今夜は駄目だと抑えかかり彼を苦しく笑わせるのみだった。すると、アンナはヨハンを介せず、もどかしそうに梶の耳もとへ直接口をよせて来て、

「You are beautiful.」

とひと言囁いた。彼には、まことに思いもうけぬ囁きであつた。このような言葉を、彼は今まで半生まだ聞いたことがかつてなかった。おそらく、アンナの知っている英語のうち、彼に与えて通じそうなただ一言の華^{はな}むけであつたろうが、しかし、この遠い異国の果てで、まだ誰からも貰^{もら}つたことのない言葉をひと言不意に貰おうとは――、梶は、貴い滴りのようにアンナの囁きを素直に胸で受けとめて悔い^あなかった。イレ―ネは喇叭^{にら}にしつこく迫り^あられていながらも、ひそかに、ときどき恨みを蒼^{あお}く放つ眼で梶の方を睨^{にら}んだ。こちらの方はこれで良いと諦^{あきら}めていた矢さきの折^つだっただけに、梶はまだ断ち切れぬ糸も感じて、ふと躓^{つまづ}くよろめきに似た思いもするのだつた。

アンナには喇叭の囁く意味も聞きとれるものであろうか、さらにイレ―ネには頓^{とん}着^{ちやく}せず梶を揺すぶり流す視線をつづけた。何か擦れかわり入りかわる暖寒の気苦勞で、ちよ

うどホールも最後の湧き立ちに近づき、崩れようとしているときだった。

「それでは帰りましょう」

とヨハンは巧みな見切りのころ合いを失わず立ち上った。時計を見ると三時を少し過ぎていた。アンナは梶の手を握りながら出口まで二人を送って来たが、ついにイレエネの姿は見えなかった。街には人通りは少なかったが、夜中の三時過ぎだというときに、ここでもう太陽が赤赤と照っていた。

ホテルの前まで来たとき、ヨハンは明日は最後の日だから朝の十一時に来ると云って、二人は別れた。梶は部屋に戻り寝台に横になっても、夜か昼か分らぬ部屋の広さがうるさく眼について眠れなかった。しかし、日本を発つとき、医者たの友人が云ったように、日本人が誰もここではあのような眼にいつも逢って来たのであろうかと思うと、この日の自分の事実も自分個人のものとは思えぬ色どりに見えて来た。そして、ここはまだ自分の考え及ばぬ罌粟けしの花の中だと思う心も次第につよまって来るのだった。

次ぎの日、梶は眼を醒さすともう十時を過ぎていた。ヨハンは眠むような顔で約束の時間

に這入^{はい}つて来た。彼はいつもより笑顔を一層大きく拡げながら、正しいハンガリヤの礼をすませて、そして云った。

「昨夜は面白うございましたね」

「昨夜は、僕も面白かったですよ」

と梶も快活にヨハンに相槌^{あいづち}を打つことが出来た。事実、昨夜のことを思うと、あれ以上^上に愉快なことはまたとあろうかと彼も思った。

「あのイレエネと喇叭ですね。喇叭はイレエネと小学校のときから同級で、そのときから彼女を思っていたのだが、今度初めてそれを云うことが出来て、こんな嬉しいことはないと云っておりまして、どうもあの二人は結婚をするかもしれませぬ」

梶はヨハンのそういうことにある真実を感じて嬉しかった。これで一組の縁を結び落してここを去ることは、舞い込んだ蝶^{ちょう}のいとなみに自分が見えて愉快だった。

「そうでしたか。それはそれは」と梶は慶^{よろこ}びを顕^{あらわ}して云った。

二人はホテルを出てから昼食のためある料亭へ立ちよった。ここは梶の滞在中出入した料亭の中では、もっとも大きな料亭だった。おそらくヨーロッパの中でも屈指のものとかと思える広広とした壮麗さで、朱色の大天蓋^{だいてんがい}を拡げた庭園では薔薇^{ばら}の周囲を巻き包み、朝

から人人の踊る姿がもう見られた。ヨハンの云うには、この街の官庁はどこも一斉に夜の九時で終つてしまい、それから後はこうして皆は遊ぶのだとの事だった。二人は食事ですますと、温泉場、古跡、発掘場などと、この日の予定は急がしく一日中自動車走らせつづけた。それに明朝早くヴェニスまで梶の飛ぶ飛行機の約束もしなければならなかったが、郊外のある景勝地帯の茶店では、二人は一番時間を長く費した。そこは眼下に拡がる平原の起伏を一望の中に見渡せる丘上の位置で、梶は軽井沢のグリーンホテルを思い出し、自然に腰もここでは落ちつくのだった。さすがのヨハンも連日の疲労を覚えた見え、容易に動かぬ梶に应じて彼もまたステッキに身をよせかけ、ともに動こうとしなかった。

どちらもとときどき黙りがちになった。緑樹の中を流れるダニューブ河や、杜^{もり}や牧場の姿は、照りかげる光の中で麗しく静だった。すると、そのとき、黙っていたヨハンはステッキの曲つた把手^{とつて}から顔を上げて、

「しらゆきは どうしていますか」

と小声で訊ねた。

「しらゆき」梶は何ごとか意味が分らず訊ね返した。

「陛下のお馬」

「ああ」と梶は思わず発して身を伸ばした。純白な姿が何か身を浄める^{きよ}ように一瞬彼を撃つて来た。しかし、ここでもまた、この罌粟の花に取り包まれた遠いはるかな異国の果ての、ヨハンの口から、突然そのような姿の浮ぶ言葉が出ようとは——ただもう今は不思議な感じだった。梶は大きなヨハンの顔を瞞^{みづ}めながら、

「あなたは どうして御存じです」と訊ねた。

「あのお馬は、わたくしがここの牧場でお買いしてさし上げました」

「あなたが」

梶は再びおどろいた。敬語の調子で、「お買いしてさし上げた」ことが、通訳の労をお取り申したという意であることはすぐ察せられたが、しかし、白雪がハンガリヤの産だということとは今まで彼も気附かなかったことだった。彼はまたもや自分の顛した手落ちを不意に感じ、今はひそかにヨハンの舌を両手で封じたくもなる複雑な気持ちに襲われた。

「白雪はここでしたか。それは非常な失礼をしました」

すつきりと白く立った馬の鬣^{たてがみ}は、しかし、梶のこうして心中詫^わびる気持ちをも、いつともなく吸いとり拭^ふき浄めて疲れも彼は忘れて来た。も早や疑うことの出来ぬこの目前の事実だった。彼は暫く遠方の空を仰ぎ見る肅然とした思いのまま、この下の牧場で産れ、ここ

に自分と対っているこのヨハンに通訳の労をとられた白雪だと思つと、一層その姿が親わしく尊とくも思われて来るのだつた。またそれがいつか慶よろこばしい気持ちにも転じて来て、暫くは眼下に静まつた牧場を見降ろしながら、さらに思いもうけぬ意味ふかまつたこの眺めだと彼は思つた。

その夜、梶とヨハンは前夜のように急がしく所所を見て廻つた。しかし、自分の前後に絶えずいるヨハンの姿は、ともにまた絶えず白雪の姿をも泛うかべて離れなかつた。梶はもう一度最後の別れに、アンナとイレネに逢いたいと思つたが、それさえヨハンにはついに云い出しがたく黙つていた。そうして、二人の自動車がある大通の前まで来かつたとき、ヨハンは右側に連つた石造の建物を指差して、

「これはジャパンというカフェーです。ここでは一番のカフェーです」

と梶に告げた。しかし、それをよく見る間もなく車は辻すべつていったとき「これは？」と梶が右側のを訊ねると「これはまだジャパンの続きです」とヨハンは答えた。梶は車の迅はやさでその外観の大きさを想像することが出来なかつたが、それはもう原語の日本にさえ一つもない立派なことだけは確かだつた。彼はひそかに驚くというよりももう黙つた。

「あそこはこの国の芸術家が一番行くところです」とまたヨハンは附け加えた。

翌朝の彼の出発は早かった。通りに朝霧のような薄^{うすもや}靄^{もや}がこもっていた。滞在中梶はヨハンに支払うべき案内料を一度も質^{ただ}さずにしまったが、五日間の料金は意外に少額ですんだ。彼は他に謝礼を出したいと思うのに、もう残りのハンガリヤ金は少く、財布をは叩^{たた}いてそれを出そうとすると、ヨハンは記念に日本へこの国の金銭を所持して帰って貰^{もら}いたいと梶に頼んだ。

飛行場まで送って来てくれたヨハンと別れるときは、梶はその別れが辛^{つら}かった。廻り始めたプロペラの音を聞きながら、

「それでは——」

と、差し出す梶の手をしつかり握って振り振り、ヨハンも「さようなら、さようなら」と繰り返した。

ああ、何んと沢山な御馳走が出たものだろう。と梶は思った。空へ舞いのぼって行く機体の窓から下を見降ろしたとき、彼は忘れずイレネと喇叭の一組の夫婦のことも考えて、
「仲良くしてくれ、仲良く——」

と、そう下に向って帽子を振るのも、またいつかそれはアンナにも振っている帽子に変
つていった。

青空文庫情報

底本：「機械・春は馬車に乗って」新潮文庫、新潮社

1969（昭和44）年8月20日発行

1995（平成7）年4月10日34刷

入力：MAMI

校正：松永正敏

2001年2月10日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

罌粟《けし》の中

横光利一

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>